

母から聞いた空襲のおはなし

ほりうちあきこ
堀内昭子さん

^{わたし}
(私は戦後に生まれたので、私の母から聞いたことをお話させていただきます。)

昭和20年頃家族は、東富山に住んでいました。

父は戦場から一時帰ってきていて、不二越に勤めていました。その時、当時1歳8ヶ月の姉がいました。

5月頃から空襲^{くうしゅう}が徐々に激しくなってきたので、家の窓には黒いカーテンをつり、外へ灯かりが漏れないようにしていました。毎日枕元には、姉をおんぶする紐^{ひも}と、防空ずきん、そして、昼のうちに炒^いっておいた豆の入った袋を置き、空襲警報^{くうしゅうけいほう}が鳴ると、町内の役員の支持により、毎日のように近くの防空壕へ、海へと逃げたりしたそうです。

空襲警報^{くうしゅうけいほう}がなると姉はおんぶ紐^{ひも}と防空ずきんをもって、「おとしい、おとしい」「早くおんぶして」とせがんだそうです。

7月31日に空から空襲予告^{くうしゅうよこく}のビラがまかれた。

8月1日夜8時頃ラジオで「ただ今、福井の方に敵機^{てつき}が旋回中^{せんかいちゅう}」と放送があり、近所の人々と避難^{ひなん}したそうです。

8月2日未明、逃げるまもなく、石が落ちてくるように爆弾^{ばくだん}が落ち、真夜中なのに、昼のように明るく、真っ赤になって、周りは火の海で、腰を抜かんさんばかりで、生きた心地がしなかったそうです。

朝になって、周りを見ると、家の壁は全て落ちていて、疎開^{そかい}をしていて鍵^{かぎ}がかけてあった家では、5メートルも鍵^{かぎ}が飛ばされ、近くは焼け野原で手や足のない人がたくさん転がっていたそうです。

東富山駅の改札口を出たところでは、不二越^{ふじこし}に働きに来ていた人達が、40名ほど被害^{ひがい}にあわれていたそうです。

富山の町には、1ヶ月ばかり入ることができず、どこも焼け野原で、神通^{じんづう}川は、焼夷弾^{しょういだん}から逃げようと飛び込んだ人々の死骸^{しがい}で、悪臭^{あくしゅう}と、川に髪^{かみ}の毛がひっかかり、はいぼぼで、はいぼぼで、川を覗^{のぞ}けないほどで、地獄^{じごく}のような光景^{こうけい}で卒倒^{そつとう}しそうだったそうです。

8月15日戦争が終わりましたが、2年、3年経っても米も配給^{はいきゅう}で、空腹^{くうぷく}を満^みたすことができず、栄養失調^{えいようしつちょう}などでたくさんの方が亡くなったそうです。

オオバコやセリ、ナズナなど田んぼのあぜがつるつるになるくらい、イナゴやタニシなど食べられる物は、何でも食べたそうです。草の中に米粒^{こめつぶ}が少し入った物を食べ、配給だけでは食べていけなかったので、着物や物などと、米とぶつぶつ交換をしたそうです。

戦争は、地獄^{じごく}だ。思い出したくもない。もう2度とあってはならない。

ここまで生きて来られたのが、不思議なくらい。と話してくれました。